

変化のなかの 若者のキャリア形成

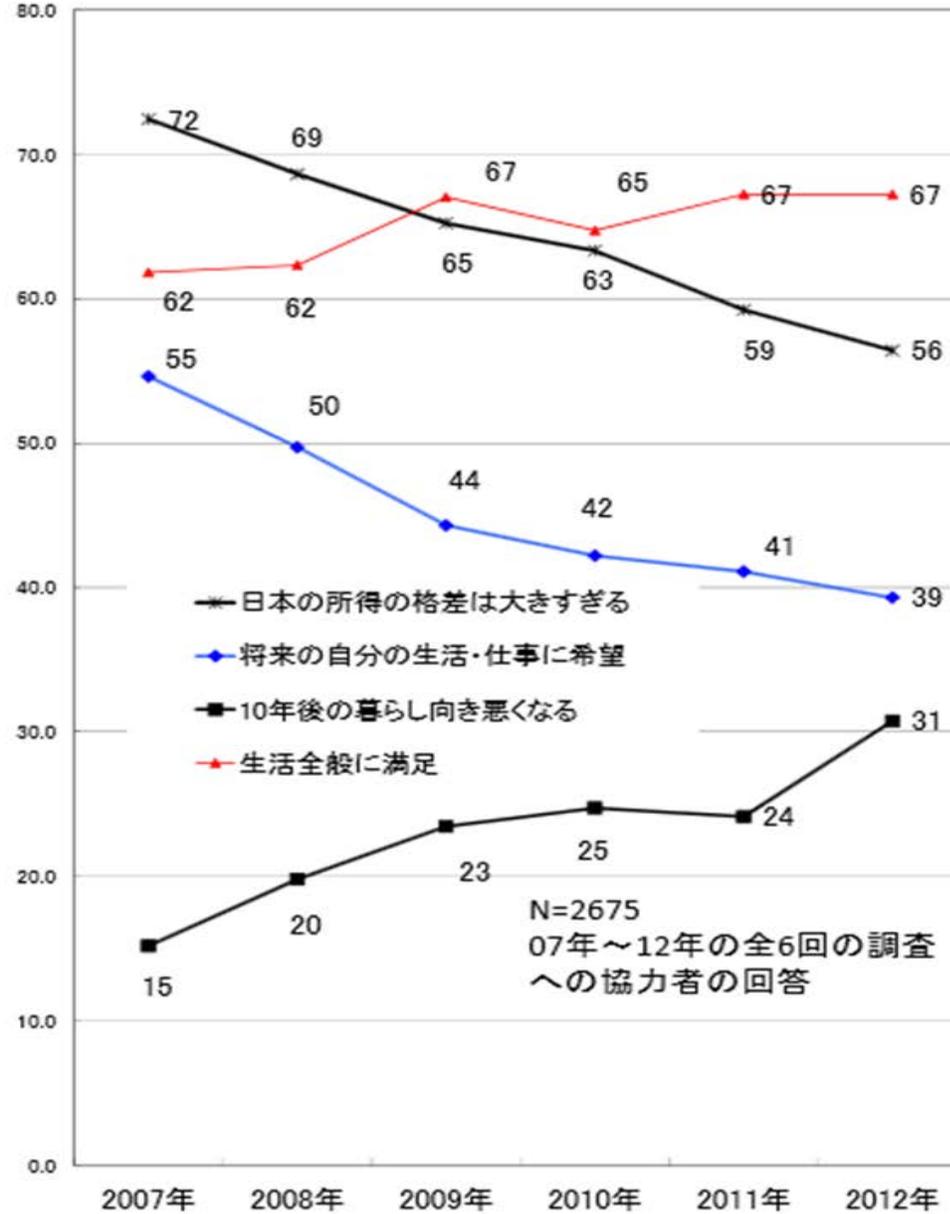
労働政策フォーラム

2017年1月23日

東京大学社会科学研究所

玄田 有史

図1 格差感・希望・将来見通し・生活満足度の変化



出所) 東京大学社会科学研究所
「働き方とライフスタイルの変化に関する
全国調査」

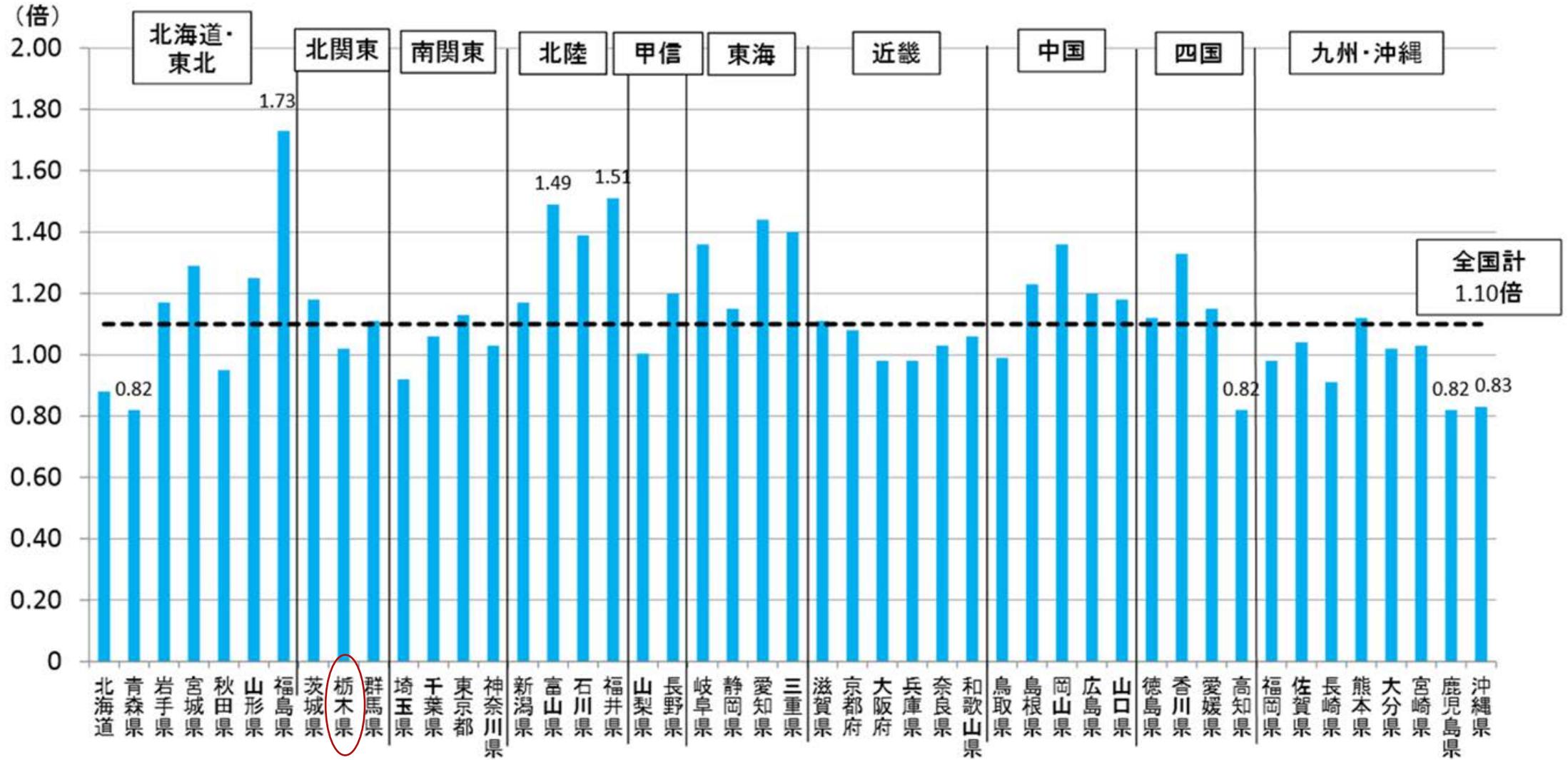
図2、最も重要な希望に関する構成比(%、20～39歳)

希望の内容	震災前	震災後
仕事	16.4	15.8
友達との関係	0.9	0.8
恋愛	4.2	2.6
社会貢献	0.7	1.1
結婚	5.2	7.2
健康	2.2	4.8
遊び	3.7	3.8
容姿	0.4	0.7
学習	2.1	1.3
家族	10.8	21.1
地域活動	0.2	0.3
その他	1.5	1.9
なし	51.8	38.7

震災前については「おぼえていない」を除く。

出所) 東京大学社会科学研究所
希望学プロジェクト
「震災後の仕事と希望に関する
アンケート調査」(2014年)

都道府県別有効求人倍率（平成26年10月：就業地別）

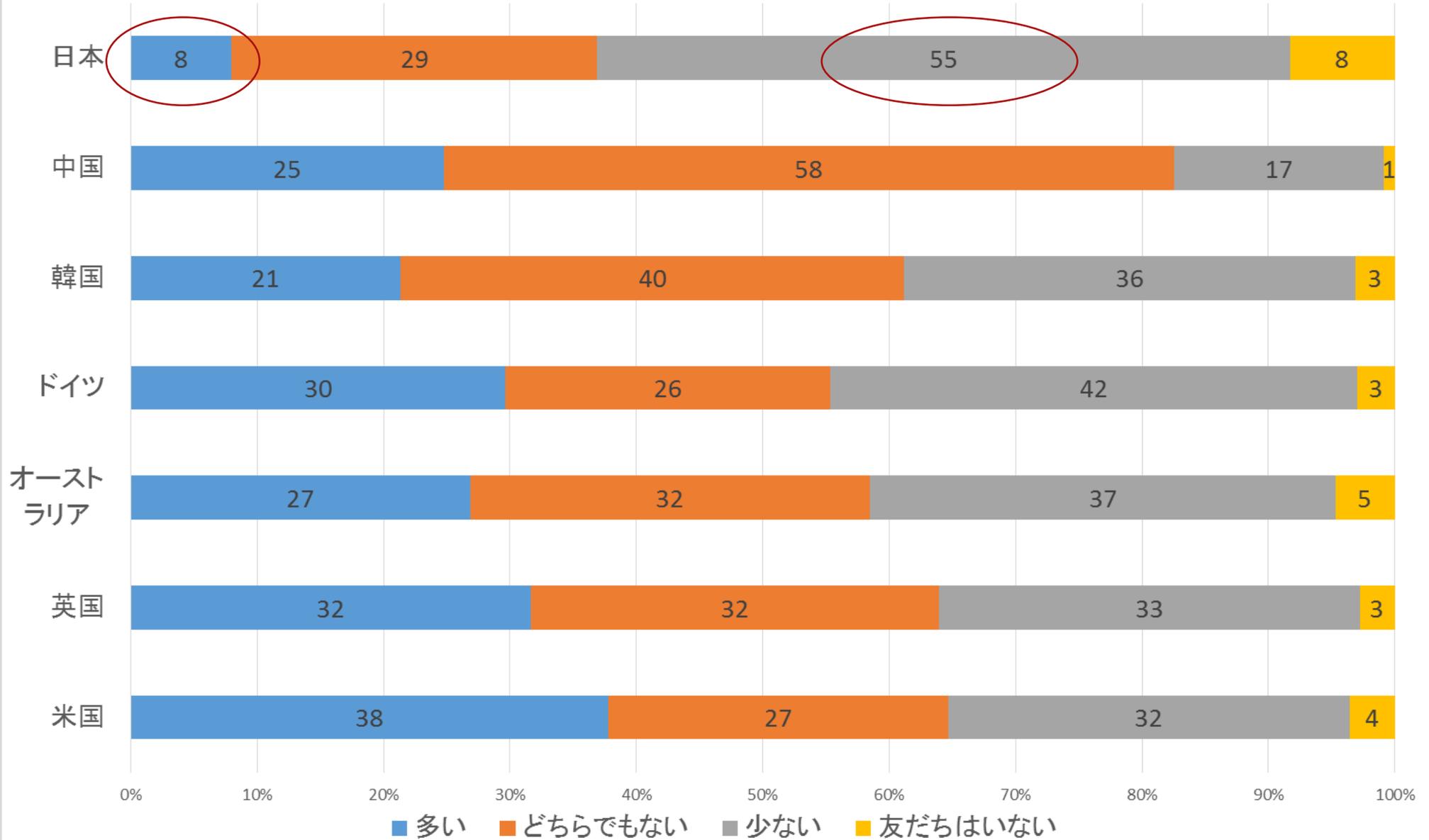


(資料出所) 厚生労働省「職業安定業務統計」

(注) 数値は季節調整値。

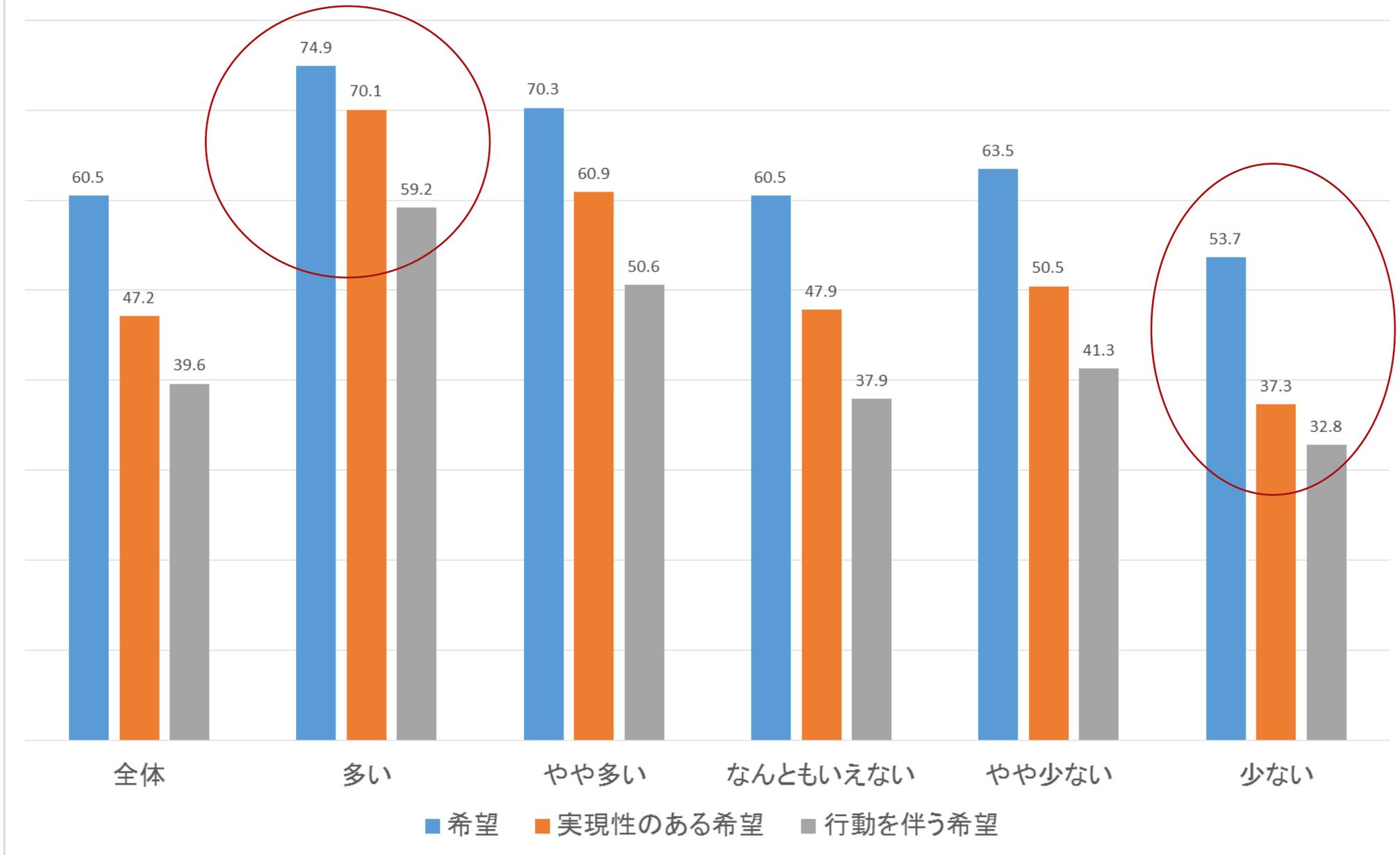
出所) (出典) 厚生労働省「雇用政策研究会」(2014年12月12日開催資料)

「あなたは友だちが多い方だと思いますか。」(%)



出所) 2014年に実施した希望学インターネットモニター調査の結果。対象は各国とも20~59歳。

友だちの多寡と希望の保有割合



出所) 東京大学社会科学研究所・希望学プロジェクト「震災後の仕事と希望に関するアンケート調査」(2014年)

地域で活躍する若者をたずねて

- かつて若者の成功物語は地方から都会に出ることにあつた。これからは、都会から地域に向かう中で「**ストーリー**」は生まれる。
- 都会で生活や仕事を経験した後に、**20代後半から30代前半**に地域で活動することを決断した若者たちが、地域の担い手になっている。
- 彼ら・彼女らが最も重視しているのは、地域で活動することへの強い「**手応え**」。良い面、悪い面も含めて、すべて直接的でスピーディに自分に跳ね返ってくる。
- 共通するのは、その「**フットワーク**」の良さ。

- 彼らの持っている**人的ネットワーク**は、きわめて広い。地方で誰かどんな魅力的な活動をしているかを知るには、彼らに紹介してもらうのが、一番早くて正確。
- 彼らの視野の先にあるのは、東京などの日本の大都市にとどまらない。むしろ日本を飛び越えて常に**世界を視野**に入れている。
- 収入は、都会時代に比べれば激減。しかし、給料の大部分が、家賃や住宅ローンに消えていくような**虚しさは一切ない**。子どもたちにとって、自然環境に恵まれた地域で生活することも重要。
- 都会生活が懐かしくなれば、休暇を取って繰り出せばよいだけ。高速道路網は整備され、近距離の大都市なら車でも数時間で行けるコンビニは至るところにあるし、宅配便が何でも届けてくれる。

大切なのは「準備」

- 20代の終わりか、30代前半のベストなタイミングで地方への移住等を実行するために、用意周到に20代を**計画的に生きる**ことが大切。
 - 休暇などを有効に活用して、**自分の希少価値を最も活かせる**地域を見つけ出すことに充てる。
 - 地域に**信頼**出来て、なんでも話しの出来る仲間を数人作る。
 - 地域でいつの日か勝負したいことを、時間をかけて恋人に理解してもらい、結婚後の家族の地方での生活について**十分に話し合う**。
 - 都会の大組織で働く間に、自分で事業を営み、成功するための、マーケティングや営業力、人脈づくりなどを、**十分に蓄積**する。
- ⇒**学校や企業が養うべきは、若者が未来に向かって「準備する力」**

企業・教育機関への期待

- 現在の若者は仕事だけでなく、「**家族**」が何より大事なことへの配慮。
- 若者が地域で活躍するための適切な「**情報提供**」。
- 若者が孤独を感じず、希望を持って行動するには、自分の知らない世界を経験し、その世界について、ささやかな誇りを持って自分の言葉で語れる大人との緩やかな連携（「**ウィークタイズ**」）が必要。
- 地域で活躍しようとする若者への「**個別的・持続的・包括的**」な支援。
- 「地域はもうダメだ」と大人が停滞している限り、若者が奮い立つことではないことへの、大人の自覚（「**希望活動人口**」の拡大）。